浄土宗コドモタイムズ
第64号
発行
浄土宗児童教化連盟
発行人
齊藤　一光
〒873-0002
大分県杵築市大字南杵築371
正覺寺内
TEL 0978-62-3063
FAX 0978-68-8301

ヤブカラシ

詩・絵　今井 康隆

ヤブカラシはカラシじゃない
ヤブカラシはカラくない
まきつきこまるは
木々のヤブ
しげればツルでヤブからす
みつかりゃ、すぐに絞首刑
きらわれもののヤブカラシ
大すきなのはアゲハチョウ
星くずのようなあまい花
そのコンペイトウが大すきで
花から花へととびまわり
ドローンのようにとびまわり
あまい　あまいコンペイトウ
コンペイトウーと
とびまわる

※ヤブカラシ…ヤブや荒地などに生えるつる草。ヤブを枯らすほど繁るので、名前の由来となる。

「にゃんどでも」

緑石　ナオ

ぼくはしあわせいっぱいでした。いつもおいしいごはんが食べられました。さむい時はあたたかい毛布でくるんでもらって、あついあつい夏はヒエヒエマットでぐっすりねむれました。やさしいやさしいお父さんとお母さんの目がいつも守ってくれました。そして、ぼくが死んじゃう日がきた時は、とても泣いて、いつまでもいつまでもだっこしてくれました。

◎　◎

ここは極楽浄土にある極楽動物天国。死んでしまった動物たちが仏さまのまわりでしあわせにくらすところです。

仏さまにむかえられたねこのにゃん吉は、生きていた時のしあわせだったようすを仏さまにお話しています。仏さまは、

「ほんとうによかったね。しあわせだったね。お別れは悲しかったけれど。この極楽動物天国に来ると、にゃん吉にやさしくしてくれたお父さんやお母さんをいつも見ることができるんだよ、声も聞こえるよ。だからお別れしたけれど、にゃん吉、さみしくないね」

「はい、ぼくはこれからこの極楽動物天国で、なかまたちと楽しくくらします。そして、やさしくしてもらったお父さんお母さんのしあわせを、ここからいのります」

「そうですね。大切にしてもらった人たちに、にゃん吉のいのりはかならずとどきますよ」

仏さまのやわらかい金色の光は、無限の方向に広がっていました。

◎　◎

どのくらいの時間が流れたことでしょう。極楽動物天国では時間がすぎることがわかりません。たくさんの美しい花がさき、やさしい光につつまれています。ずーっとずーっと変わることがありません。

ふとにゃん吉は仏さまにたずねました。

「仏さま、ぼくは生きている時も今もずーっとしあわせです。でもここから下界を見てると、ぼくと同じねこなのに、食べものがなくて、ゆっくりねむるところもないのらねこがいます。仏さま、ぼく、のらねこの世界を見てみたくなりました」

「仏さま、今度はぼくをのらねこに生れかわらせてください」

「にゃん吉は極楽動物天国に来て、ずいぶんたちましたね。生れかわりたくなりましたか。今度はのらねこがいいんですね。のらねこになっても、やさしく楽しく生きなさい」

そう言って、仏さまはにゃん吉を見つめ、ひたいからレーザービームのような光をはなちました。そしてお経をとなえると…

◎　◎

「ありゃーにゃん！　にゃん！」

にゃん吉は農家の小屋のすみのわらにくるまれ、三人のきょうだいと、母さんねこのおちちをすっていました。

「うお～、おいちい。おっぱい」

お母さんねこはぺろぺろなめてくれます。きょうだいに負けないように手でおちちをおしおし、いっぱいすいました」

でもにゃん吉たちは、毎日のようにあぶないことに出会います。夜になると大きなイタチがこそこそとせまってきます。いいお天気にさそわれ、小屋の外にチョロっと顔を出すと、まっ黒なカラスのくちばしが急降下。また雨の日には、こわそうなおす猫がギラギラ目で近よってきます。ついには農家の小屋のじいさまが、

「こんなとこ、ねどこにしたらこまるんじゃ」とわらをどかし、小屋をきれいにかたづけてしまいました。母さんにくわえられたにゃん吉たちは何回も何回も引っこししました。ゆっくり休めるところはなかなかありません。そんな毎日をくりかえしていると、きょうだいも母さんもバラバラになってしまいました。にゃん吉はひとりになりました。心ぼそくてこわくて、ニャーニャー鳴きながら歩きました。やさしく守ってくれる目はもうありません。カラスがカァカァ鳴いたとき、にゃん吉は気づきまし

た。ぼくはのらねこなんだ。ひとりでなんでもできるようにならなきゃ。にゃん吉はぐーんとのびをしました。

のらねこ生活は毎日毎日がドキドキでした。ごはんは、田んぼのカエルや虫をつかまえました。時には鳥だってねらいます。ときどきやさしそうなおばさんが、こっそりフードをくれました。いつもはらぺこだったけど、にゃん吉は人間がいやがることはぜったいしません。こまったりおこったりする人間の顔がにゃん吉はきらいでした。ずーっと昔、やさしくやさしくしてもらった人の目が好きでした。おだやかでしあわせだったころのことを覚えているのは、仏さまのレーザービームに当たったからでしょうか。にゃん吉は毎日必死に一生けんめい、そして自由に生きました。

それから何年もたちました。にゃん吉はじいさんねこになっていました。体が重たくて、カエルにも虫にもにげられ、鳥なんて全然とどきません。おなかはへっているのかいないのかわからない。とても体がしんどい

「ぼく、死んじゃうのかな…」

にゃん吉は目をとじました。

それからのことは覚えていません。ただ体をやさしくやさしくなでてもらったので、気持ちよくなったこと、気持ちよくなった時、仏さまのお顔が見えたことは、はっきりわかりました。

◎　◎

「仏さま、ぼくまた極楽動物天国にもどれますか」

にゃん吉は言いました。すると金色の光が照らすやわらかい光の道の向こうにやさしいお顔の仏さまが手を差し出してくださいました。

「にゃん吉おかえり、よく生きましたね。ゆっくりここでお休み」

仏さまは金色の光をより強くはなち、にゃん吉をつつみこみました。そして、

「わたしの名をよべば、みんなここに来れますよ」

とほほえみました。

◎　◎

「このねこは、本当にお行儀がよくてかわいかったのよ。よくがんばったね、おつかれさま」

ときどきフードをこっそりくれたおばさんは、にゃん吉をだっこして「なむあみだぶつ」と言いました。

おわり

質問　どうしてお坊さんは手を合わすの

（京都　小二　女子）

答え

お坊さんにかぎらず、お寺や神社にいくと手を合わせます。手のひらを合わせることを「合掌」といいますが、この習慣は2500年も前からインドという国ではすでにありました。合掌は仏様を敬う時にします。敬うというのは思いやるということです。仏様に思いを向ける　思いやるときに合掌します。

食事の時にも合掌して「いただきます」と言います。なぜでしょう。

それは食材に対して思いを向けるためです。お肉やお魚、お野菜、お米、すべてに命があります。命を頂かないと私たちは生きていけません。だからこそ、命を思いやり合掌します。

手を合わすことは思いやることです。手を合わせることで、仏様や頂いた命を思いやれます。手を合わせる生活を送りましょう。

これも仏教の言葉だよ！

「うろうろ」

小腹がすいてコンビニの中を「うろうろ」と…

なんとなく街を「うろうろ」として…

特に目的もなく、動き回るさまを「うろうろ」と表現しますが実はこれも仏教語。「うろうろ」の「うろ」を漢字にすると「有漏」。「漏」とは心の汚れを意味します。漏れ出てくる心の汚れ、つまり煩悩をさします。煩悩がない状態を「無漏」といい、煩悩がある状態を「有漏」といいます。

煩悩のまま、コンビニでさまよう姿を「うろうろ」、街で欲を求めてさまよう姿「うろうろ」。

「うろうろ」も時には楽しいですが、目的を持った日暮らしを心がけましょう。

みんなで考えよう　ちがいさがし

絵：岡本こずえ

右の絵と左の絵の違いを5つ見つけてください。

ハガキに答えを書いて左記まで送ってください。正解者の中から抽選で30名に記念品をお送りします。記事の感想や意見もいっしょに書いてくださいね。しめきり10月20日です。

送り先
〒873-0002
大分県杵築市大字南杵築371
正覺寺内
浄土宗児童教化連盟事務局
TEL 0978-62-3063
FAX 0978-68-8301

前回の答え

お知らせ

◇みなさんからの記事を待っています。学校でのこと、家の中でのこと、家族のこと、友だちのことなどを書いて送ってください。またみなさんからの作品も待っています。絵や作文、お習字など何でもけっこうです。

◇送り先は　〒873-0002　大分県杵築市大字南杵築371　正覺寺内　浄土宗児童教化連盟事務局
TEL 0978-62-3063　FAX 0978-68-8301
感想もいっしょに書いてくださいね。

ぷくぷく編集室

本屋さんに行ったことはありますか。最近はインターネットで本を買う人が多くなっています。

ある本屋の店員さんが言っています。お店に来ている親子の会話が聞こえてきて、「ネットだと自分の興味のある本しか見ないけど、本屋さんに来ると、思いもしなかったおもしろそうな本を見つけたりすることがあるでしょ。だから本屋さんに来て、いろんな棚を見るのがいいのよ」とお母さんが子どもに話していたそうです。

うれしいなあ、と店員さんがつぶやきました。

本屋さんでは未知の本との出会いがありますね。みなさんも本屋さんで新しい発見をしてください。一生の本と出会うかも知れません。